

**【使徒書日課】** フィリピの信徒への手紙 3章7～21節

7しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。8そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、9キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。10わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、11何とかして死者の中からの復活に達したいのです。

12わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。13兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、14神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。15だから、わたしたちの中で完全な者はだれでも、このように考えるべきです。しかし、あなたがたに何か別の考えがあるなら、神はそのことをも明らかにしてください。16いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。

17兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。18何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。19彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。20しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。21キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。

**【福音書日課】** ヨハネによる福音書 17章13～26節

13しかし、今、わたしはみもとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。14わたしは彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです。15わたしが願うするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。16わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないのです。17真理によって、

彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。<sup>18</sup>わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。<sup>19</sup>彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです。

<sup>20</sup>また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。<sup>21</sup>父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。<sup>22</sup>あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。<sup>23</sup>わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。<sup>24</sup>父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。<sup>25</sup>正しい父よ、世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っており、この人々はあなたがわたしを遣わされたことを知っています。<sup>26</sup>わたしは御名を彼らに知らせました。また、これからも知らせます。わたしに対するあなたの愛が彼らの内にあり、わたしも彼らの内にいるようになるためです。」

## 死者を記念する【こども説教のために】

世界中で、毎日多くの人が死んでいます。戦争で、殺人で、事故で、病気で、人が亡くなるのは、悲しむべきことです。そのようなことが避けられても、人は齢を重ねれば必ず死にます。『聖書』には、「こうして、人の一生は百二十年となった」（創世記 6:4）とあります。大昔から、どれほど健康に恵まれた人でも、120年を超えて生きることはないのです。

人は死んだら「天国」に行く、と多くの人が言います。神を信じていなくても、そう言います。わたしたちは、神を信じて、そう言います。見えない神を信じて、わたしたちは、死んだ者はその神のすぐ近くに迎えていただけると信じているのです。礼拝をするたびに、わたしたちは、すでに死んだ者たちが天の神の御近くで、天使たちと共に大聖歌隊となって讃美を歌う者となってわたしたちの礼拝を支えてくれている、と気づかされるのです。

礼拝のたびに、わたしたちは、神の御前に進み出る者として、先に地上の生涯を終えた死んだ人々を記念しています。中でも、そのようにすることをお教えくださった主イエスを記念しています。主イエスを死んだお方として、そして死者の中から復活なされたお方として、記念しています。

## 死者の中からの復活

昨年在天会員記念礼拝から一年の間に6名の名を加えた「名簿」をお配りしました。総勢158名の死んだ方々です。もちろん、わたしたちの間には、ここに名の記されていない死んだ方々が少なくなりません。石神井教会員として亡くなられたのではない方、教会として葬儀に関わらせていただいたのではない方は、ご遺族のお申し出があったときだけ、ここに名を加えて記念させていただいているのです。ご家族を亡くされた方にお申し出いただきたいと願っていますが、躊躇なさる方も少なくないようです。そうであればこそ、皆さんに知っていただきたいのは、教会がどれほど死んだ方々の記念を大切にしているか、ということです。

キリスト教会は、そもそも死者を記念することから始まったのです。弟子たちの教会は、主であり師であったお方、主イエスの死を記念することから始まりました。それは、しかし、ただその死を悼み、嘆き悲しむものではありませんでした。弟子たちが主イエスの死を記念したとき、彼らは、主イエスを死者の中からご復活された方として記念したのです。弟子たちが始めた死者の記念は、復活者の記念にほかなりませんでした。

「神は、イエスを死者の中から復活させてくださった」と告げた弟子たちが始めたのは、彼らの間で死んだお方を記念することでした。

彼らはもともと、ユダヤ教徒として終わりの日の死者の復活を信じていました。地上の生涯を終えて死んだ者は眠りに就き、終わりの日に呼び起こされて、つまり復活させられて、神の御前に立たされ、生きていたときに為したことを詳らかにされて、最終的な裁きを受けることになっている、と。

神は、人を死者の中から呼び出されて、その人のすべてを思い起こされるのです。神がそうなさるのならば、わたしたちも、そのことを知らされずに済むことはないでしょう。弟子たちが、主イエスを死者の中から呼び出され、復活させられた方として知り、その生涯を思い起こし、記念したのは、神がすでに終わりの日を待たずにそうなさっていると気づかされたからです。弟子たちがそのことに気づかされたのは、他でもない主イエスが生前、弟子たちの前でそうなさっていたからでしょう。神がそうなさるように、人を死者の中から呼び出し、立ち上がらせ、その人の人生の歩みをお憶えになられたのが、主イエスというお方でした。

教会は、復活を信じています。それは、わたしたちが死んだ後に天国に行けるとか、愛する者と再会できるとか、それだけのことではありません。その人の地上の全生涯が、神に思い起こされ、記念されている。そう信じて、わたしたちも死者の地上の全生涯を思い起こし、記念し続ける。そのような交わりの中に生き続ける。それが、復活を信じる、ということなのです。

## 一つになる

もちろん、わたしたちは、どれほど親しかった者のことであっても、神のように、あるいは神になり替わって、一人の人の全生涯を思い起こし、記念し尽くすことはできません。「ヨハネ福音書」がその巻末に、「イエスのなされたことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くなれば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう」（ヨハネ 21:25）と記したように、わたしたちは、どんなに短い生涯のものであっても、そのすべてを思い起こし、記念し尽くすことはできないのです。それほどに、人の全生涯は、思い起こすべきこと、記念すべきことに溢れています。

教会は、ただ、弟子たちが主イエスのご生涯を記念したように、人の生涯を記念してきました。人がその生涯の中で神に示された道をいかに歩んだかを思い起こし、記念してきたのです。それがキリスト者として生きた生涯であったならば、その人がキリストと歩まれた生涯を思い起こし、記念してきたのです。いいえ、その人が自覚してキリスト者として生きた者でなかったとしても、教会は、その人と共にキリストが歩んでくださった生涯として、その人の生涯を記念することさえできるのです。

それは、主イエスが願われたことでした。主イエスは、御父である神との間に「父と子」と言えるほどの親しい交わりを持たれることに満足されず、弟子たちをその交わりに加えてくださいました。弟子たちが主イエスを記念したとき、彼らは、自分たちも御父である神によって、また主イエスによって記念されていることを知るようにならしたでしょう。その弟子たちは、自分たちのサークルに満足することなく、周囲の人々を次々に、その交わりに迎え入れていったのです。互いを憶え、記念し合う交わりです。死者の中から復活された主イエス・キリストを通して、生きている者も死んだ者も記念し続ける教会が、そこに始まりました。

わたしたちは皆、神に与えられた生涯の道のりを歩みます。その生涯を、人の目で評価したならば、わたしたちは、互いに優劣をつけないではいられなくなるでしょう。けれども、神の御前に、ただキリストが共に歩んでくださった生涯として記念するならば、わたしたちの生涯は、かけがえのない貴重なものとして憶えられるでしょう。

すでに生涯を終えられた先達を、死者として記念しましょう。その中に、キリストと共に歩んだ者としてのタスキを次の者に引き継いでくださった方がいるのは、なんと幸いなことでしょうか。このタスキなしには、力強く歩み抜くことは困難だったかもしれないのです。そのタスキは、今、地上を生きるわたしたちの肩に託されています。